

鹿苑寺方丈修理工事について

主席研究員 井上 年和

1. はじめに

鹿苑寺では、平成17年4月から平成19年10月にかけて方丈の解体修理を行った。ここでは、その工事内容について報告を行う。

2. 鹿苑寺の概要

鹿苑寺（通称金閣寺）は京都市北区金閣寺町に所在する。この地はもともと神祇官に仕えた伯家の領有するところであったが、承久2年（1220）に、後の太政大臣西園寺公経が尾張国の家領と交換して氏寺「西園寺」を建立し、寺の北には別業「北山第」が営まれた。

応永4年（1397）にこの西園寺の地を室町三代將軍足利義満が譲り受けて「北山殿」を造営し、約10年間ここで政務を執った。義満の死後、義満の菩提を弔うため勧請開山に夢窓疎石を迎え、禅宗寺院として「鹿苑寺」と称されるようになった。

応仁・文明の乱では鹿苑寺も戦場となり、多くの建物が被害を受けたが、乱後しばらくして方丈や客殿の再建が始まり、復興がなされていったようである。

江戸時代に入ると、慶長期以降に西笑承兌・鳳林承章、延宝期には文雅慶彦などが住持を勤め、寺領・寺域と施設の整備に努めた。また、天保年間に焼失した庫裏が再建され、ほぼこの時期に現在の景観が整えられた。

境内は大正14年（1925）史跡・名勝に、昭和31年（1956）特別名勝・特別史跡に指定され、平成6年（1994）には世界遺産に登録された。

3. 方丈について

方丈は鹿苑寺の本堂であり、客殿とも称せられていた。梁行11.12m、桁行19.03m、一重、入母屋造り棧瓦葺とし、二軒、疎垂木で、組物も前後の側柱上舟肘木を備えるだけで簡素な構成となっている。金閣の南東に南面して建ち、南東隅に玄関を付ける。室内間取は六間取の方丈形式で、正面中央に東西三間の室中、その奥に一間半の仏間を配し、各々左右に東西二間の脇間を持ち、正面に広縁、両側面に入側縁をまわしている。

西側の縁は狭屋之間と称し、この部屋の西側柱筋には板戸が嵌められているが、楣を三間飛ばしとし、小壁部分は現在漆喰壁であるが、もとは欄間障子が嵌められていたことから、西側、則ち鏡湖池及び金閣に対し開放的な造りであったことが伺える。

仏間は前半間を拭板敷とし、中の半間を通しの壇、奥の半間を仏壇・真の間とする。すべて猿頬天井を張り、前列三間は室境を竹の節欄間として一つの天井面を構成している。

当方丈は「鹿苑寺由緒書」及び小屋裏に保存されていた棟札から延宝6年（1678）の建立と考えられていたが、小屋裏内に「天保六年」銘の木連格子裏板が残り、この裏板と他の古部材が同時代と認められることや、屋根の獅子口からも天保六年及び七年の銘が見られること、また、仏壇下に19世紀前半とみられる地鎮遺構が検出されたこと等を鑑みると、この時期の改修は大規模なものであったことが伺える。

その後は、明治39年には縁廻りの補修、昭和23～24年には床組の補修、昭和30～31年には小屋組・軒廻りの補修がそれぞれ行われている。

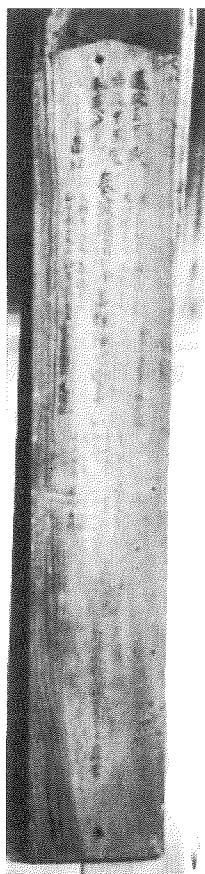


写真1
延宝6年
棟札



写真2
明治39年
棟札

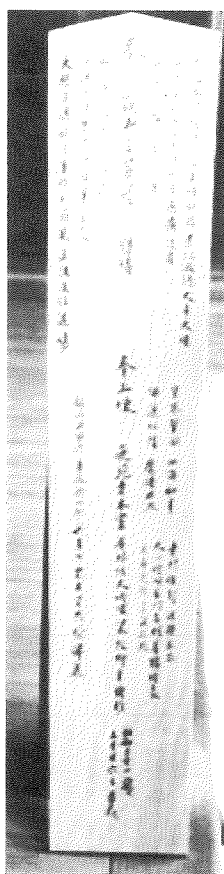
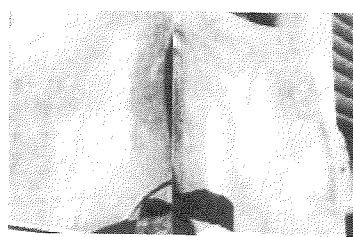


写真3
昭和31年
棟札



洛北衣笠山 小松原村 瓦師平石工門	天保七年 丙申 初春作之	瓦師 小倉久兵衛 細工
-------------------------	--------------------	-------------------

写真4 大棟東獅子口銘

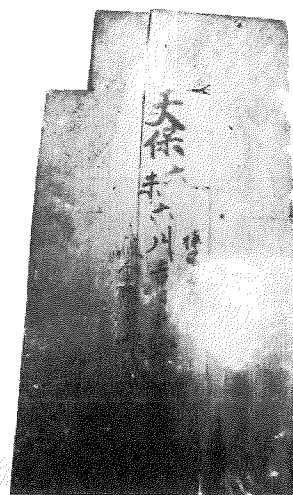


写真5 妻裏板墨書

4. 工事の経緯

工事に先立って平成16年6月から事前調査を行い、平成16年12月には方丈修理委員会を組織し、平成17年4月から8月まで解体調査、8月から12月まで地盤調査及び発掘調査を実施し、調査結果に基づいて修理方針の策定を行った。その結果、地下遺構や古材をできるだけ保存し、床や壁の仕様を部分的に当初に復原し、建物の価値をできるだけ損なわないよう留意し、小屋裏と床下等の見隠れ部分で耐震補強を施すこととなった。

平成18年3月から工事を再開し、平成18年10月24日には上棟式を行い、平成19年10月に無事竣工し、11月13日に落慶法要が営まれた。

方丈修理委員会出席者

鹿苑寺	有馬頼底住職	山木康稔執事長	緒方香州執事	須賀玄集執事	
	梶谷承忍	藤井潔事務長	山岡茂	上仲泰三	竹下豊弘
整備委員	川上貢委員	永井規男委員	中村一委員		
京都府	石田裕二文化財保護課主査				
京都市	石崎了文化財保護課課長	玉村登志夫係長	河原伸治同課技師		
京都市埋蔵文化財研究所	鈴木久男調査課長	小檜山一良主任			
北村誠工務店	北村隆一	清水年男			
建築研究協会	藤本春樹主席研究員	大森彦一研究員	井上年和研究員		

(役職は当時)

工事関係者

総合請負・木工事	北村誠工務店	畳工事	藤井畳
仮設工事	瀏上組	表具工事	矢口浩悦庵
基礎工事	水野建設	塗装工事	かどや漆器店
石工事	芳村石材店	金具工事	森本鋸金具製作所
瓦屋根工事	寺本甚兵衛製瓦	板金工事	田中板金
土居葺・軒付	宮川屋根工業	電気工事	足立電気工業
左官工事	田代千治左官店	空調設備工事	明和管工業
建具工事	大谷建具工房		

5. 調査事項

5-1. 破損調査

基礎 礎石は二段に組まれているものがあつた。これは、床組補修の際に高さ調整のため元の礎石の上に礎石を新設したためである。

軸部 不同沈下は最大24mmでさほど大きくはないが、柱の傾斜測定では南側への傾斜が大きく内法1,600mmに対し、最大34mm (1/47) であつた。

柱足元は近年の修理の際で根継されていたが、根継材の断面が不揃いで転用材もみられ、仕口の形状もまちまちで、芋継のものも見られ、構造的に不安定な状態となつていた。

柱は足固との仕口で大きな断面欠損が生じていた。これは、足固が元々柱に柄差しであつたものを、取替えの際に横から流し込み、大入で納めたためである。

また、南広縁の柱は虫害がみられる他、大きく湾曲している柱もみられた。

小屋組 昭和30～31年の修理において、小屋組材は全て取り替えられていた。

床組 昭和23～24年の修理において殆どが取り替えられていた。

床束は柱足元の根継ぎ材同様に転用材が用いられている箇所があるが、その材にも腐朽がみられた。

妻飾り 破風板、懸魚、木連格子、裏板等全般に風蝕が顕著であつた。

屋根 一般的に経年による劣化がみられた。特に古瓦を用いている北側、東側では棧瓦、丸瓦、熨斗瓦とも破損や凍損が顕著であつた。

また、各棟の獅子口は漆喰の剥落や、割裂、凍害がみられた。

建具 建具は殆どが近年修理されたようであるが、板は戸板の風食が進行し、框の漆塗りが下地から剥落していた。

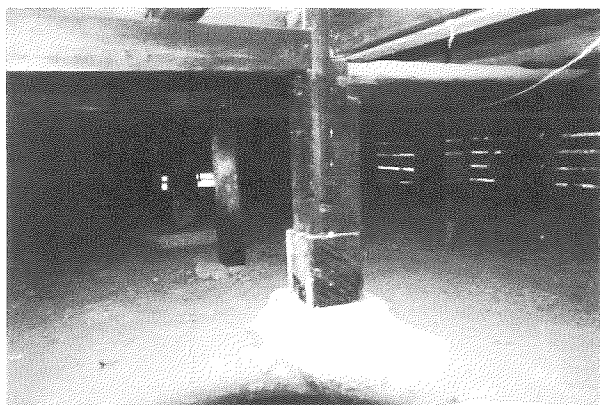


写真6 礎石は二段に組まれており、柱足元はすべて根継されていた

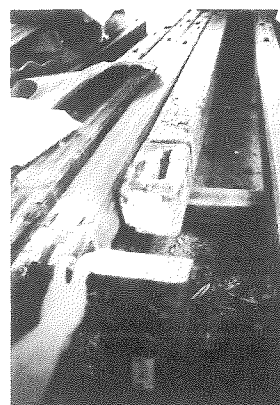


写真7 広縁柱の足元は床板面で芋継となつていた

5-2. 古 図

鹿苑寺の方丈を描く古図としては以下の5点が挙げられる。寛永期の製作とされる「金閣遊楽図屏風」、正保2年の「北山鹿苑寺境内之図」ともに現方丈の建立以前の姿であるが、庫裏との配置関係は現状と変わっていない。

安永9年の「都名所図絵」では方丈の屋根が柿あるいは檜皮葺きに描かれている。寛政2年の「北山鹿苑寺絵図」では、方丈（客殿）は規模・間取りとも現在と全く同じである。いずれも庫裏の規模とその東側の建物配置は現在と異なっており、庫裏の建て替え以前の境内の様子を示すものと考えられる。

明治28年の「京都北山金閣寺全図」では庫裏周辺の建物配置も現在と同じで、方丈の屋根も瓦葺きとなっている。

これらの古図と他の史料や調査結果から、延宝時の造営では庫裏と方丈の配置関係は慶長期を踏襲し、天保時に庫裏とその東側の建物を一新し、方丈は延宝期のものを踏襲しながら屋根を瓦葺きに改めたことが推測される。

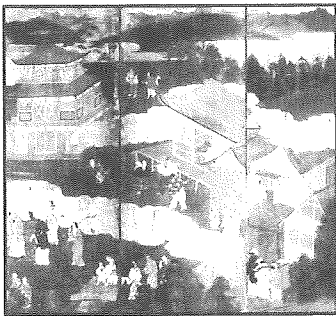


図1 金閣遊楽図屏風（部分）
（寛永頃）

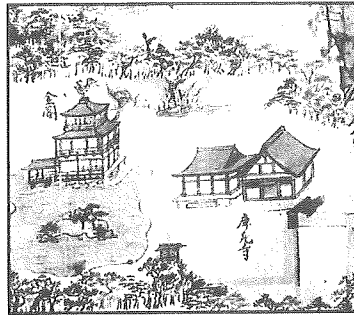


図2 北山鹿苑寺境内之図（部分）
（正保2年 1645）



図3 都名所図絵（部分）
（安永9年 1780）

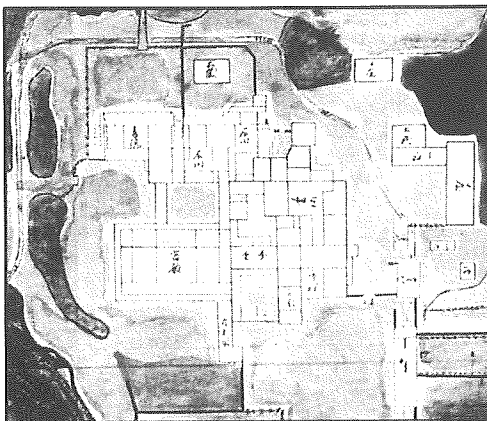


図4 北山鹿苑寺絵図（部分）
（寛政2年 1790）

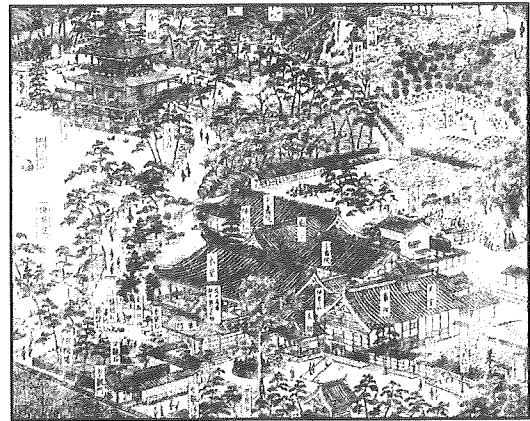


図5 京都北山金閣寺全図（部分）
（明治28年 1895）

5-3. 痕跡調査

- 室中床** すべて畳敷きとしているが、四周の半間幅では床板に仕上げが施されておらず、中央の十畳部分は拭板となっていることから元は廻し敷きであった。
- 上間前室西側及び下間前室東側建具** 現在戸襖引き違いとなっているが、敷鴨居が三本溝となっており、障子が内側に嵌められていたと考えられる。
- 狭屋之間床** 狭屋之間は現在全面畳敷きであるが、東側に切目長押が通り、唄金物を取り付いていた痕が残っており、床板は拭い板であるので、狭屋之間は元々板敷きであった。
- 東広縁間仕切り** 東広縁では南入側筋から三間目に架かる^{まくさ}楣下端の板張を解体すると二本溝痕跡が残っていた。東側柱西面には敷居痕があり、ここには建具（引違い）が設置されていたと考えられる。
また、南から四間半目にも^{まくさ}楣下端に二本溝があるが、両側柱には敷居の痕跡が無く、建具があったかは不明である。
- 広縁東側建具** 南一間は板戸、次の一間は舞良戸であるが、いずれも東側を襖とする。また、板戸両脇の柱には鍵の痕がある。東側の旧使者の間に接続されていた痕跡である。
- 仏壇花頭窓** 開放であるが、内側に一本溝敷鴨居が残っていたので引分戸であったと考えられる。
- 仏壇両脇貼り壁** 貼壁であるが、土壁の痕跡がみられた。
- 東側軒桁南部** 外部に風食痕、垂木の釘穴が残っていた。

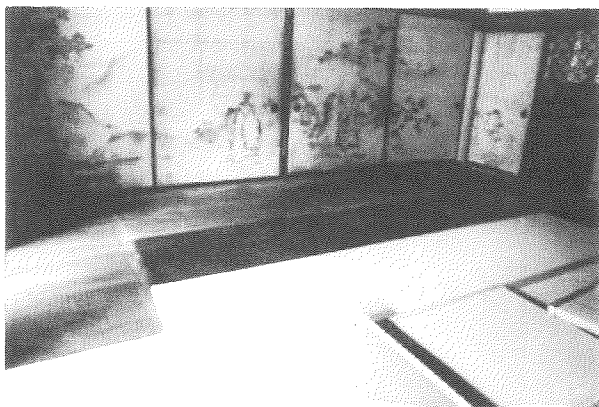


写真8 室中床 廻し敷きの痕跡（東より）



写真9
仏壇北東柱南面
解体前は貼り壁であったが、土壁の痕跡が見られた

5-5. 発掘調査

発掘調査は財団法人京都市埋蔵文化財研究所により実施された。その結果、現在の地表面は延宝期に盛土して造営されたが、表面の叩き面はほとんど取り外され、束石の据え替えが数度見られることが確認された。また、仏壇下には19世紀前半とみられる地鎮遺構が検出された。

慶長期の前身の方丈とみられる東西建物跡などの遺構も検出され、室町時代の二時期の遺構面も部分的に検出された。

6. 修理方針

柱の傾斜が大きく、軸部の構造が不安定な箇所が見られたため、解体工事により根本修理を行うこととなった。

地盤調査の結果、方丈西側の地耐力が不足していたため、南西隅の一部に鉄筋コンクリート製の耐圧板を設置し、他の箇所は埋め戻しの上充分転圧を行い、表面は叩き仕上げとした。

軸部は柱5本を取り替え、その他は根継等補修の上再用し、梁は全て再用した。また、耐震補強のため頭繋ぎを付加し、内法貫も幅を1寸5分と太くした。

床組は、耐震補強のため足固の成を1尺とし、既存の仕口を痛めず柱に組み込んだ。

狭屋間の床は畳敷きから板敷に復原した。

屋根は大棟獅子口1対と隅棟獅子口3個を補修の上再用し、軒唐草と平瓦は東流れの北部に再用し、他は全て新調した。また、平部分は空葺きとして建物の重量を軽減し、軒付は修理前と同じ柿の二重軒付とした。

壁は仏壇両脇の貼り壁を土塗り壁に復原し、小壁には耐震補強のためステンレス製の筋違を埋め込み、建具は杉戸板を新調し、古いものは別途保管し、襖は建て合わせ調整の上再用した。

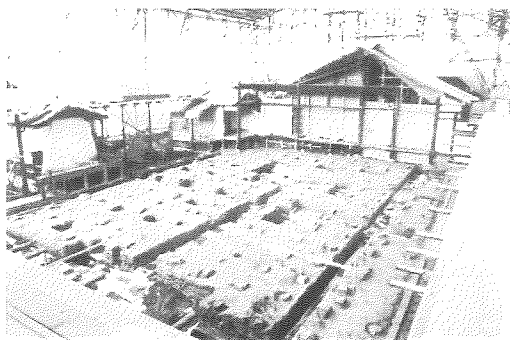


写真12 発掘調査状況

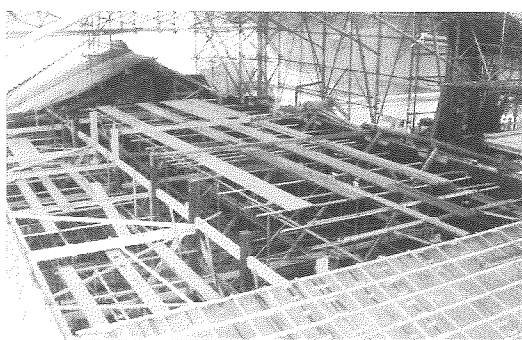


写真13 軸部組立中 頭繋ぎの設置状況

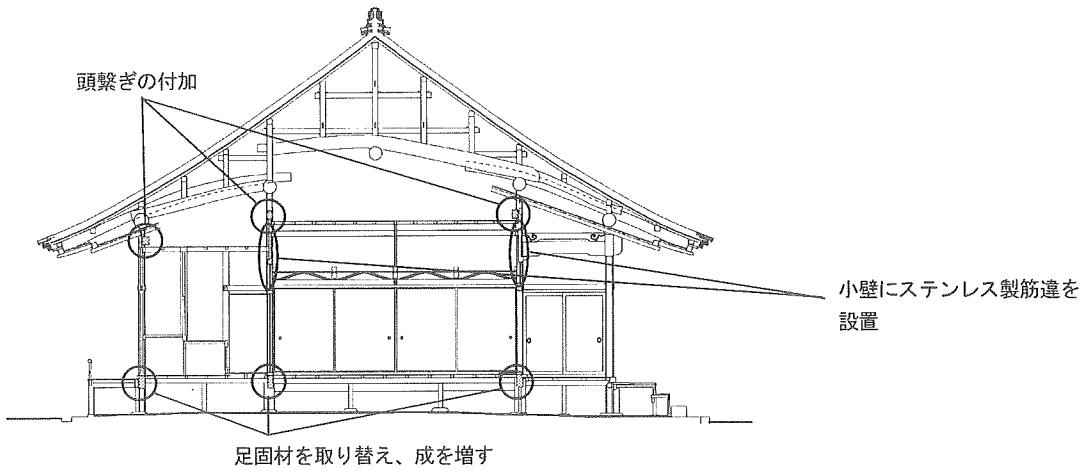


図8 構造補強図

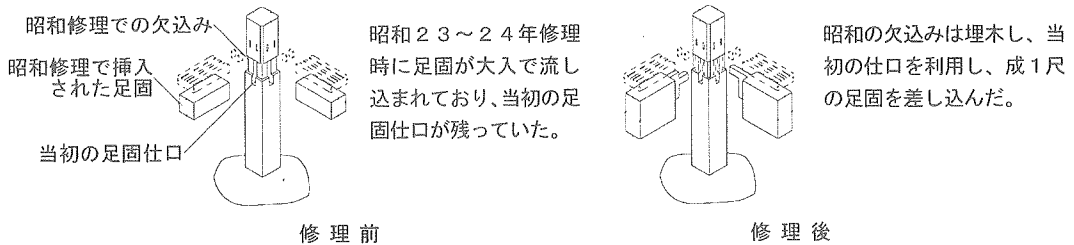


図9 足固詳細図

7. 杉戸絵について

方丈には杉戸が五箇所、計10枚嵌められているが、修理前のものはそのまま保管し、新規に作成した杉戸には石踊達哉、森田りえ子の両画伯による絵画が描かれた。両画伯とも4面ずつ計8面に、それぞれ四季を題材とした草花が描かれ、簡素な建物に彩りを与えた。



写真14 石踊達哉画伯作「双樹紅白梅図」

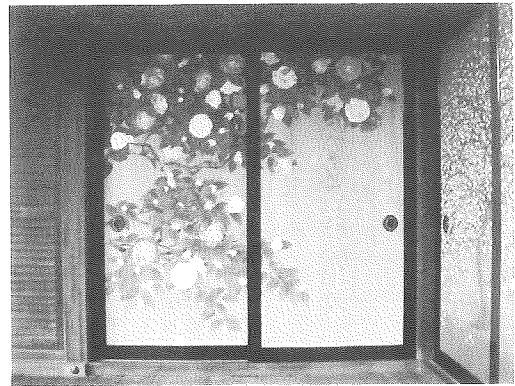


写真15 森田りえ子画伯作「冬椿」

8. おわりに

方丈の修理にあたっては、整備委員の各先生方には終始ご指導、ご助言を頂き、施工を担当した北村誠工務店を始めとする各関係業者には多大なご協力を頂いた。また、本稿の掲載に関しては鹿苑寺様の許可を頂いた。ここに改めて深く謝意を表します。

尚、本工事に関しては修理工事報告書を作成する予定である。

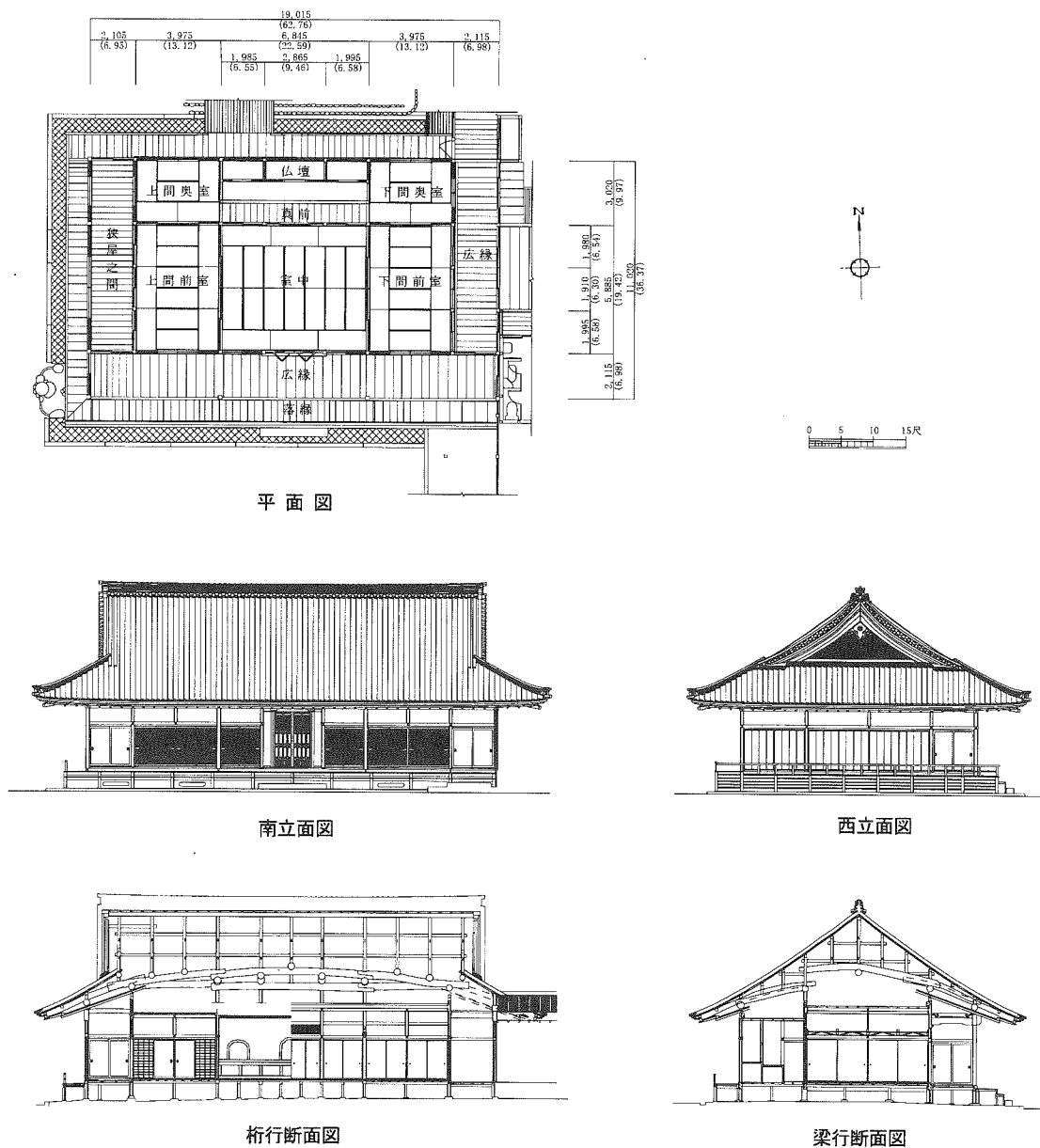


図10 竣工図